



Title	日本語の雑談での「あなたに関する知識を示す発話」の会話分析を用いた研究：発話末の下降調の「ヤン」に着目して
Author(s)	千々岩, 宏晃
Citation	日本語・日本文化研究. 2015, 25, p. 78-89
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/54504">https://hdl.handle.net/11094/54504</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 日本語の雑談での「あなたに関する知識を示す発話」の会話分析を用いた研究 —発話末の下降調の「ジャン」に着目して—

千々岩 宏晃

## 1. 研究目的

人は、様々な場面で様々な人と関わりながら生きている。その中で、ある人間(以下、「わたし」と呼ぶ)は別の他者(以下、「あなた」と呼ぶ)と出会い、わたしはあなたの名前や出身地、趣味、お気に入りのレストランなど、あなたに関する知識を増やしていく。そしてそれらを、しばしばあなたに示すときがある。本研究の目的は、日本語の雑談における「あなたに関する知識を示す発話」の中で、特に発話末に下降調の「ジャン」が用いられている発話の社会的行為を、会話分析の手法を用いて分析し、記述することである。

## 2. 研究対象：「あなたに関する知識を示す発話」と下降調の「ジャン」

あなたに関する知識(以下、あなた知識)を示す発話とは、発話の中に今会話している相手に関する情報が含まれたものである。例えば、次の会話の断片の410行目のような発話のことである。次の断片は、YO(女性)とKE(男性)の友人同士が電話で話しているものを抜き出したものである。YOがボーイ・フレンドと別れるかもしれないとKEに言う。

### 断片1 japon 6186 [いつものあなたと大違い]

403	YO:	でもね::::↑わ↑か↑ら↑んね::::はつきりいってどうなるか::.
404		(.)
405	KE:	なんでまたそんな話になるわけ?
406	YO:	ええ?
407	KE:	なんか随分大違いじゃん。 [07m00]
408		(.)
409	YO:	[なにが?]
→ 410	KE:	[いつも-いつもと.(.)hh(.)なんだかんだでよっちゃん彼氏
411		と仲いいんだよなっていうよっちゃんと大違いじゃん。
412		(2.0)
413	YO:	↓ちょ↓つと↓ね↓:↓:, ↓最↓近↓ね↓: ↓: ↓::.

この410行目の発話は、「なんだかんだでよっちゃん彼氏と仲いいんだよなっていうよっちゃん」というYOに関するあなた知識を含んでいる。もし仮に二人が会って二日目の知り合いであるなら、KEがYOに対してあなた知識を引き合いに出して発話をする権利や、そもそも知識が不足しているなどの理由で、違和感のある発話だと感じられるだろう。

本稿の目的は、このように「あなた知識を示す発話」が、会話の中でどのように用いられ、会話をしている当人たちにとってどのような社会的行為<sup>i</sup>を構成しているのかを記述すること

である。本稿では特に、発話に410-411行目のように、下降調で発話された「ジャン」という言語形式が含まれているものを主な分析の対象としている。

### 3. 先行研究

#### 3-1. 下降調の「ジャン」に関する先行研究

本節では、下降調の「ジャン」の用法の先行研究を俯瞰し、研究手法の違いを述べる。

まずは、方言学の分野に目を向けたい。松丸（2001）は、東京方言における「ジャン（カ）」と「デハナイカ」を対比し、ジャンがデハナイカの用法のうち「情報提供」を担う用法に限られて用いられると指摘している。それに対し、嶺田（2005）は、山形甲府市および中巨摩郡の若年層が用いる「ジャン」の用法をアンケート調査し、4つの用法に類別している。

- 1) 話し手の持つ情報の提供 (e.g. 昨日は映画に行ったじゃんね。)
- 2) 勧誘の確認の表現 (e.g. じゃあ映画行くじゃん。)
- 3) 確認要求と情報提供の表現 (e.g. 学校いたじゃん↓)
- 4) 話し手の感情の表出

(e.g. 非難：そう言ってたじゃん、感動：可愛いじゃん、アドバイス：見ればいいじゃん)

嶺田の用法の分類では、(2) の用法が新方言 (cf. 井上1994) として紹介されているほか、用例 (31) のように、共通語の用法としても共通する点が幾つか見られる。

ジャンの元の形とされている共通語の「デハナイカ」の用法については、劉（2008）が詳しい。劉は、「デハナイカ」が、従来、確認（認識）要求用法（嶺田2005の(3)）を中心にして議論されてきたと述べ、その他の意味用法が十分に議論されていなかったと述べる。劉は、「デハナイカ」の用法に含まれる、聞き手に認識の形成や記憶の喚起を要求することを「対他的な要求性」と呼び、さらに「よ」「だろう」との互換性テストを用いることで、「記憶喚起」「新規生成」の軸を設け、以下の4つの用法を生成している。

記憶喚起	
記憶想起の表出	記憶喚起の要求
記憶想起(*よ/*だろう)	記憶喚起(*よ/だろう)
Hに非要求	
認識生成の表出	認識形成の誘導
意志表出(*よ/*だろう)	勧誘表明(よ/*だろう)
発見(*よ/*だろう)	気付かせ(*よ→よ/*だろう→だろう)
評価・意見(*よ→よ/*だろう)	認識誘導(よ/*だろう→だろう)
新規生成	

(図2：「デハナイカ」と「よ」「だろう」との互換性 劉2008 pp.97)

上記で見たように、「デハナイカ」「ジャン」については、1つの研究で4つ以上の「用

法」が記述されているものがほとんどであり、劉の提示する確認要求の様な共通に議論されている用法を除いて、記述が乱立している状態であるといえるだろう。

しかし、先行研究で「用法」と述べられているものは、本稿が記述しようとする「社会的行為」とは異なるものである。後述するように、本稿で分析する発話は劉の分類における「記憶喚起の要求」の用法であるが、対他的要求性が高いことから見て、この発話の後にはなんらかの応答が、他者から行われているはずである。しかし、記述された用法を見てみると、どれも肝心の他者の応答が考慮されておらず、やり取りの基本である連鎖組織<sup>ii</sup>の記述として不十分であると言わざるを得ない。例えば劉の示した「記憶喚起の要求」のデータ

(38) 耕作「男同士じゃないか、ホントのこと教えろよ」『パパ』 (劉2008 p.96)

に対して「そうだったな、男同士だったな」という「記憶を想起」した事を示す発話が返答されるのか、「ホントのこと教えろよ」という【行為要求】について返答するのかで、その発話で行われた社会的行為が違う記述の可能性を持つことになる。

ゆえに、本研究では、記述を乱立させないような、参与者の相互行為に基づいた記述が必要になる。第3-2節で、参与者の指向性によった“内からの”記述について、詳しく述べる。

### 3-2. あなたの知識に関する先行研究

「あなた（他者）」は、自己との関係の中で、哲学や社会学の分野で、特に構築主義の観点からこれまで論じられてきた。例えば、片桐（2003）は、シンボリック相互行為的視点や、構築主義的視点から分析し、自己は他者との相互行為（インタラクション）を通して構築されて行くものである、という立場を、新たな自己論の視点として提案している。

しかし、それが、常に人々によってなされているものであるのか、という疑問がある。片桐（2006）は、人々が相互行為中に取得するカテゴリーが、自己を決定する認知社会学的な要因であると述べるが、Sacks（1992）が指摘するように、人々はカテゴリーを常に同時に平等に指向<sup>iii</sup>しているわけではない。例えば、稿者は、男性、20代後半の人、大阪方言話者、妹が居る人など、無限の記述可能性を持っている。しかし、あるカテゴリーがその意味を持つうるのは、まさに相互行為中のやりとりの中で行われる“その時”であるはずだ。研究者がルールを現実にあてはめていくという社会学的手法（好井1999、天田2001）のとは別の方法で、本稿が実際に社会の成員として存在する参与者たち自身が、「あなたの知識」を用いてどのような行為を行っているのかを記述する必要があると感じている。

ゆえに、先行研究3-1節で観察した「ジャン」「デハナイカ」の先行研究も、見直さざるを得ない。まず、方言をしゃべるか、ということは、参与者によって常に指向されているわけではないからである。むしろ、方言の使用が相互行為の俎上に上がる時、それが参与者によって指向されることで、始めて問題になることだからである。さらに、ある発話に対して用法の記述が行われた場合、その発話の次に来る応答が“確かに前の発話に連鎖している”ことが、その用法を精密な記述として裏付ける。それ故に、後方に来る発話の観察なしに、記述

をすることは、参与者の相互行為の記述からかけ離れてしまう。このことは、「ジャン」「ジャナイカ」という言語形式が生み出す社会的行為の研究手法に、参与者の内部から記述するという研究手法が用いられて来なかつたことも示唆していると言えるだろう。

#### 4. 研究方法

##### 4-1 分析方法

本研究は、会話分析の研究方法を用いる。本研究では、参与者が行う社会的行為（この場合は会話）の音声データを文字化した資料と共に分析し、「ジャン」という形式がどのような社会的行為のリソースとして作用しているのかを記述する。社会的行為の記述の一面として、Pomerantz (1980) は、発話者がしばしば、相手に自分の限られた知識を語る（Telling my side）ことで、相手の情報を引き出そうとすることを記述し、それを「釣りだし（fishing）」と名づけたものを概観する。

[NB:II:2.-1]

A: Yer <u>line's</u> been busy.	ずっと話し中だったね。
B: Yeuh my fu(hh)! 'hh my father's wife	そう。私のち(hh)!-私の父の奥さん
called me. .hh So when she calls	が私に電話して..hh 母が電話して
me::, .hh I always talk fer a long	きた時は:: .hh いつも長話なの。
time. Cuz she c'n afford it'n I	私はお金えないけど、彼女は
can't. hhh heh .ehhhh	払えるもの。hhh heh .ehhhh

(Pomerantz 1980 より引用。右の和訳は引用者による。)

ここでポメランツは、A が自分の限られた知識を示すことで、B をそれ以上を知る者として扱うことで、より詳細な情報（description）を引き出しているという。また、それが非難（accusing）や不満述べ（complaining）でなされた時、それに答えることが発話者にゆだねられた形になることを指摘する。ここで仮に答えたくない場合は、「ずっと話し中だったね」と言われた後に、①「単に受け取る」か（「うん、そうだよ。」），②新しい情報として受け取る（「ああ、本当?」）事ができる。前者①は、単に「情報の提供—受け取り」という連鎖として処理することで、【釣りだし】として「聞かない」選択をしたことが明示される。後者②では、自らがそのイベントにアクセスを持っていない人として振る舞うことで、「自身の語り」を保留している、と記述できる。ポメランツは更に以下のように述べる。

自分サイドを語ることで（中略）次に話すことが適切だということを提案しながら、話すかどうかの選択を与えていた。「自分サイドの語り」は、あなたの権利としてのプライバシーに対しての認識を示したり、指向を示したりする事ができると同時に、あなたのプライベートな情報を完全に尊重しているわけではないことも示している。

(Pomerantz 1980, p.198 : 訳, 下線は引用者による)

ポメランツは、人々がプライバシーを尊重する規範に有ること、そしてそれが会話の中で違反を含みながら構成されているという、行為そのものの記述という側面（「釣りだし装置」そのものの発見・記述）と、それが働く人々の社会的背景（プライバシー）の両方の記述を行った。本研究も、その行為記述・社会背景の記述の両面の記述を目指している。

#### 4-2. 対象となるデータ群

本稿は、今後の議論を容易にする目的で多様な人がアクセスできる、CallFriend という電話会話のデータを用いる (MacWhinney 2007)。対照とした会話データ群は、15 の会話、450 分間であり、性別や年齢層、男女などを考慮し選択した。本稿ではその中でもひとつのデータ (japn6186) を用いて分析・記述する。

### 5. 分析

本章では、いくつかの代表的な断片の分析を提示することで、あなた知識が示される発話と発話末形式「ジャン。」が同時に用いられる発話の、連鎖上の規則性、先行する文脈の性質を通して、行為の記述を行い、それらを比較、検討する。

#### 5-1. 各断片の分析と記述

本節の目的は、観察された三つの断片に分析と記述を施すことである。次ページの断片2を見てみよう。

別れることをほのめかす YO に対し、KE は YO 自身の意見を聞く (392)。それに対し、YO は「別れたほうがいいと思う」と意見を述べる。それの受け取りが完了し (394-397)、KE はさらに意見を要求する (398) が、399 以降、意見提示が得られない時間が続く。403 の「でもね…」から始まる発話は、398 に対する意見提示に聞かれうる。

それに対し、405 行目の「なんでまたそんな話になるわけ?」という発話は、「別れるかもしれない」という根本を問う【情報要求】にも見えるが、【非難】にも見えるという多義性 (ambiguity) を含んでいる (Schegloff 1984)。406 YO の「ええ?」が、KE にとって“理解”に対する他者開始修復 (Other initiated repair) に聞こえ得るものも、その多義性を汲んでのことだろう (cf. Open Class Repair Initiation: Drew 1997)。その証拠に、407 行目で、KE はターンデザインを「なんか」から「なんで」へと別の発話の組み立てに言い換えていることが明らかになる。

それに対し、407 行目に対する 408 の沈黙は、YO の反応の不在に聞かれうる。YO は、再度「なにが (大違いなの)?」ということで、405 行目を言い換えた 407 行目を、さらに特定化するように KE に要求する。理解の問題が生じているのである。

410 で KE は、「いつも-いつもと。」と時間を特定しているわけだが、そもそも YO がわからないのは「なにが」という主題の方なので、KE はオーバーラップした 409 を聞いて、再

度 407 行目を言い直しているわけである。

断片2 japon6186 [いつものあなたと大違い] (断片1の再掲)

(YO (よっちゃん・女性) と KE (男性) の友人同士が電話で話している。 KE の「彼氏元気?」という質問に対し、 YO がその彼氏と別れるかもしれないと答える。 困らずもヨリを戻す見込みがないことをほのめかす YO に対し、 KE はすでに「過去」なのかを聞く。)

389	YO:	いや::::っていうかあ,	【情報提示】
390		(3.4)	
391	YO:	>わかんない<.あっちはあんまり別れたくない。みたいやけど。【情報提示】	
392	KE:	よっちゃんは別れたいの? [6m35s] 【意見要求】	
393	YO:	いやあたしは <u>別れた</u> ほうがいいと思う. 【意見提示】	
394		(1.0)	
395	KE:	°あ:::: = 【受け取り】	
396	YO:	=う::::ん. 【受け取り】	
397		(1.8)	
398	KE:	.hhh そうなのお:?: 【確認要求】	
399		(1.0)	
400	KE:	.hhhh	
401		(.)	
402	KE:	hhhhhhh ((鼻息:ため息のようだ))	
403	YO:	でもね::::わ↑か↑ら↑んね::::はっきりいってどうなるか:. 【意見提示】	
404		(.)	
405	KE:	なんでまたそんな話になるわけ? 【非難】	
406	YO:	ええ? 【修復開始】	
407	KE:	なんか随分大違いじゃん. [07m00] 【非難】	
408		(.)	
409	YO:	[なにが? 【修復開始】	
→ 410	KE:	[いつも-いつもと.(.).hhh(.)なんだかんだでよっちゃん彼氏 と仲いいんだよなっていうよっちゃんと大違いじゃん. 【非難】	
411		(2.0)	
412			
413	YO:	↓ちよ↓つと↓ね↓:↓:, ↓最↓近↓ね↓: ↓: ↓:. 【受け入れ】	
414		(.)	
415	KE:	kach .hhh ts	
416		(.)	
417	YO:	>ちよっと聞いてよ::::< 【情報提示】	

((大学にコピーを取りに行って駐車位置でトラブルになったという話))

このように見していくと、410 行目のあなたの知識を示し、ジャンと共に起する発話は、407、さらに元をたどれば、405 のやり直しであるということが言える。

410-411 への反応としての 412 行目を見ると、YO は、2 秒の沈黙し、413 で「↓ちよ↓つと↓ね↓:↓; ↓最↓近↓ね↓: ↓: ↓:」と答えている。これは程度的、時間的に限定してはいるけれども、それを【受け入れている】と記述できるだろう。それに対して、KE は実質的な返答を行わない。これは、KE が YO がさらに何かを話すのを待っていると記述できるだろう。

それに対して、YO は 417 行目から、全く別の話をする。それは“話をそらしている”ことを可視化させる。現に、KE は駐車トラブルに関する一連の話が終わった後、別れるかもしれないという話を振り返り、その話を逸らしたこととして述べ、YO もそれを否定していない。

## 断片3 断片2の続き。駐車位置のトラブルについて語り終えた後、

533	YO:	あ:::あ:::でも:::考えちゃうわ:::° う:んやっ[ぱり° -
→	534 KE:	[話を逸らしたのに
→	535 KE:	ごめんね?he[h
	536 YO:	[え:::?
→	537 KE:	話をせっかく逸らしたのに。
→	538 YO:	heh(.) ¥ホンマに[あ(h)ん(h) [たは¥

これらのことから、YO が KE の 410-411 行目の発話を、逸らすべきもの、つまり、YO から KE の【非難】として聞いたと記述できるだろう。それに対して、YO が「なんだかんだ言って彼氏と仲のいいよっちゃん」といういつもの YO とは違うことを部分的に認めながらも、話題に深入りすることなく話をそらすという、【非難】に対する【回避】を行っていると記述できる。

さらに、次の断片4は、【なだめ】であると、記述できるだろう。

## 断片4 japn6186 [あなたもそれぐらい怒る]

((断片2の続き。駐車でトラブルになった相手に YO が謝ったことを話す。))

465	YO:	=それで:::, 「ああほんとすいません」って言ったら:, 【情報提供】
466		(.)
467	YO:	「>そんなん言つてももう遅いわよ::: ! <」とか言って::? 【情報提供】
468		(.)
469	KE:	ehehehe [.hh
470	YO:	[(ほん(.)ま)アメリカ人:.. 【評価】
→	471 KE:	まあ機嫌-i まあ::, 待たされたら::, よっちゃんそれ 【なだめ】
472		ぐらいおこんだからまあ良いじやん。
473	YO:	ええ? 【とぼける】
474		(.)
475	KE:	.hh=
476	YO:	=やでもさあ警察呼ばんでもいいやん? 【反論】
477	KE:	.hh
478		(.)
479	KE:	でもいつかえってくるかわかんない s-人警察呼ぶだろう. 【不同意】
480		(0.8)
481	YO:	う:::ん. でもねえ::: 【再反論】
482		(.)
483	YO:	いやでもほんで:::, 【情報提供】

((結局相手は警察を呼んでおらず、事なきを得たという話になる。))

二重並列駐車をして先に駐車していた相手が出られなくなり、YO が怒られるということが起き、それを YO に語っている場面である。470 で YO は「(ほんま) アメリカ人」ということで、このトラブルを「いつも大袈裟な」アメリカ人という人種に帰属させている。それに對し、KE は 471-472 であなた知識を示す発話を、「ジャン」という形式を用いながら発話する。

注目するべきは、473 から 476 行目で起こったことだ。473 行目では一見、YO が「ええ?」と、修復開始しているように見える。断片4の406 行目と同様に見えているということだ。

しかし、KE が何か話そうとしたとき、YO は「やでも警察呼ぶんでもいいやん?」と KE に同意を要求する。ターン冒頭の「(い) やでも」から、YO が KE471-472 を“修復しなくても”理解可能であることがわかる。言い換えれば、473 の「ええ?」は単に聞き取りや理解の問題が起きたのではなく、471-472 を“聞いていないふりをする”働きがあったと記述できるのである。また、471-472 の発話の内容も、重要だ。KE は、YO が怒っていることを、「あなたも待たされれば同じように怒るのだから、それほどムキになることではない」となだめているわけである。

このように見ていくと、471-472 を【なだめ】として記述することは妥当であるように思われる。まず、聞こえているにもかかわらず「ええ?」と【とぼけ】ている点。それに、476 が「やでも」で始まり、反論としてデザインされている点から、KE471-472 が“反論すべきものとして YO に聞こえた”という記述が出来る。そしてその反論の必然性は、【なだめ】の方法が、あなたのいつもの行動を引き合いに出し、皮肉にも YO 自身が直前に別のカテゴリーとして取り扱った、「アメリカ人という人種」と類似しているということを指摘しているという方法によって、達成されていることに由来する。

さらに興味深いのは、断片 4 が断片 2,3 と同様に、話題を先に進めることによって、結果的に話をそらしていることを可視化することである。YO の 476 の反論に対し、KE は不同意する(479)。それに対し、「う::ん。でもねえ::ん」と納得していないように再反論の準備をしようとするが、483 では「いやでもほんで::;」と話を先に進めるわけである。ここから、「警察を呼ばなくてもいいのではないか」という反論は立ち消える。

さらに、断片 5 を見てみよう。いつも皿洗いをやらないという YO (216) に対し、ルームメイトは YO が皿洗いをやることが当然だと考えている(218) という話が出ており、それに對して YO の評価(「<キツイでしょ:::::結構::[:>]」)が同意される。

YO は、ルームメイトが感謝しないことが、皿洗いをしない可能性の一つかもしれないと意見提示する(229)。しかし同時に、これが KE にとって【自己卑下】として聞かれた可能性にも注目しよう。KE は、230 でその意見提示を小さな声で「あ::::」という形で受け取る。単に受け取るだけであれば、「そうだよね」や「かもね」などと受け取ることが出来るはずだが、自己卑下に対してそれを肯定することは、非選好の応答<sup>iv</sup>である。実際に、KE はそうしていない。これは、229 が自己卑下として KE に聞こえたことの証拠になり得る。

それに対して、233 での発話は、「でもまあ」という言葉で始まり、「やってて」というあなた知識を提示し、「えらいじやん」という評価で終わる。これは、「あたし案外やらないんちゃう?」という自己卑下に対して、「いやあなたはやっているし、それはえらいことだ」という自己卑下への【不同意】になっている。

235 で行われているのは、【自己卑下】→【不同意】の後であるから、非常に反応しにくい位置である。ゆえに、235 が「う:::ん。」という発話でとどまっているのも納得できよう。それ

に対して、KEは不同意に対する【理由説明】(236)をするが、上でみた断片群と同様に、話は全く別のものへと進んでしまう。

### 断片5 japon6186 [感謝されない皿洗い]

((YOは皿を洗いながら電話をしている。KEは、YOがお皿洗いをしていると、ルームメイトが感謝してくれるのではないかと言うが、それはないとYOが言う。))

211	KE:	[「あつ皿洗ってくれ-あ:台所やつて くれたの:?=ありがとう」ぐらいでないの?]	【情報要求】
212			[3m32s]
213		(0.2)	
214	YO:	いやそれは言わないよ。	【情報提供】
215	KE:	言(h)わ(h)な(h)いの?	【確認要求】
216	YO:	うん↓だつ↓私↓い↓つつ↓も↓や↓ら↓な↓い↓か↓ら。	【確認/情報提供】
217	KE:	￥ああ￥そ(h)う(h)な(h)の?	【情報受理】
218	YO:	だからこうやってたまにやると「当たり前でしょ。」=って感じ。	【情報提供】
219	KE:	あhhaha!￥そうなのか!ahh￥	【情報受理】
220		(.)	
221	KE:	[.hhhh	
222	YO:	[<キツイでしょ::::::結構:::[.:>	【評価】
223	KE:	[ahuhuhu .hh ￥やりがい無い	
224		ね(h)え. ehehe￥	【同意・評価】
225	YO:	え:?	【修復開始】
226	KE:	.hh￥やりがいが無いね hえ￥.	【評価・修復】
227	YO:	う:::ん結構ね::::[う:::ん.	【同意】
228	KE:	[ahuhuhu!h↑h.hhhh	
229	YO:	>↑だ↑か↑ら<↑あたし案外やらない(..)んちやう:?	【意見提示(自己卑下)】
230	KE:	。あ:::::。	【一応の受け取り】
231	YO:	う:::ん.	【受け取り】
232		(0.2)	
→ 233	KE:	でもまあやつてエライじやん。	【不同意】
234		(.)	
235	YO:	う:[:::ん.	【受け取り】
236	KE:	[それでもやつてんだから.	【理由説明】
237	YO:	.hh <u>てか</u> :::,	
238		(2.0)	
239	YO:	あの::::試↑験があ?	
		((大学の期末試験の話になる))	

### 4-2 連鎖上の規則性と先行する文脈の性質

本節では、4-1節で施した分析と記述をもとに、連鎖の規則性と、先行する文脈の性質を記述する。

4-1節でみた三つの断片は、どれも全く別の話題である。しかし、あなた知識を示し、かつ発話末の形式「ジャン」を用いた発話の直前、直後も勘案すると、以下のように抽出された連鎖には共通点が見られる。

各列が各断片の抽出された連鎖、二行目(太字部分)がターゲット発話に対応している。このように見ると、直前の発話(網掛け部分)は、【意見提示】、【評価】、【自己卑下】

と、B 自らの考え方や価値観を述べるという共通性がみられる。それに対して、【非難】【なだめ】【（自己卑下に対する）不同意】は、それを否定する、という点で共通している。また同様に、ターゲット発話の直後（イタリック部分）は、沈黙や【とぼけ】により、その非難やなだめ、不同意に対して非選好的な応答を行っているところで、共通している。

[表] 断片から抽出された連鎖と共通連鎖

断片 2, 3・抽出連鎖	断片 4・抽出連鎖	断片 5・抽出連鎖	共通連鎖
A : 【意見要求】 B : 【意見提示】	B : 【情報提供】 B : 【評価】	B : 【情報要求】 A : 【情報提供】 B : 【評価】 A : 【評価】 B : 【意見提示(自己卑下)】	あなたに関する知識 X ↑矛盾 B : 【意見 Y・価値観 Y の提示】
A : 【非難】 B : (沈黙) 【受け入れ】 →【非難の回避】	A : 【なだめ】 B : 【とぼけ】 【反論】 A : 【不同意】 B : 【非難/咎めの回避】	A : 【不同意】 B : (沈黙) 【受け取り】	A : 【(X を用いて Y を)否定】 B : 【拒否】

また、あなたに関する知識を用いてあなたの考え方を否定できるということは、そのあなたに関する既存の知識があり、それを用いてあなたの現在の（すでに持っている情報から見れば）矛盾した考え方を否定する、という状況になければいけない。

よって、あなた知識がジャンと組み合わされて発話されるとき、それは、①あなた知識 X があり、②あなたがあなたの意見・価値観 Y を提示し、③それが X と矛盾する、という文脈が必要になる。ここから、「ジャン」を含む発話を【矛盾の指摘】と呼ぼう。

さらに、あなた知識を用いた否定は、相手を【励ます】ような行為に用いられることがある。たとえば、ピアノの発表会を控えた友人が「大丈夫かなあ」と不安がるのに対して、「前回は上手く行ったじゃん。大丈夫だよ」という発話を行えば、それは「あなたは前回うまく行った」というあなた知識を用いている。そして、それは、相手の現在の不安な態度、言い換えれば、相手が失敗するかもしれないという価値観や考え方を変更させる手続きとして、あなたの記憶を“呼び覚まし”ながら (cf. 劉 2008 「記憶喚起」), 矛盾を指摘することで【励まし】ている。

これは、以上の 3 つの断片であなたの知識を用いた行為が、単に【非難】や【なだめ】、【（自己卑下に対する）不同意】という行為記述では收まりきらないことも示している。確かに、【矛盾の指摘】は、主に【非難】として聞かれやすいという性質を含んでいる (cf. 嶺田 2005 用法(4))。しかし、この【励ます】という行為の可能性は確かに存在する。ゆえに、【矛盾の指摘】は、この記述によって妥当性があると言える。

#### 4-3. 一貫性への指向

本節では、以上の分析から、我々の持つ社会的な背景を記述する。ちょうどポメランツが、【釣り出し fishing】をプライバシーの問題と関連づけたように、である。では、なぜ断片の中で彼らは【矛盾の指摘】をするのだろうか。

そこには、わたしがあなたに対してどのようなことを要求するのか、という人間の基本的指向が隠されているように思われる。人々は「私の（した）ことは私が一番よく知っている」と、自己所有（self-ownership）の正当性を主張しがちであるように思う（鷺田 2013: p.124）。しかし、今回の研究で明らかになったことは、全く逆のことである。参与者たち自身は、彼ら自身の知識を用いて、あなたの【矛盾の指摘】を行う。これは、“過去のあなた”と“今のあなた”が同一の人物であることを、わたしから保証する作業であるように思われる。つまり、あなたは、過去のあなたと今のあなたを対照させ、常に一貫性を持った行動をすることを要求されている。換言すれば、以上の断片で行われていたのは、あなた知識に基づいてあなたの（発話に基づいた）社会的行為と自己の一貫性へ監視と、それに対する抵抗や回避であるといえるだろう。

まとめると、わたしは、①既存のあなた知識と照らし合わせ、行為の一貫性を要請しており、②それが破られた際には、【矛盾の指摘】によって、あなたに行為と過去のあなたの知識を照らし合わせ【否定】するという行為を行っている、と結論付けることが出来るだろう。

### 6. 結論

本稿では、三つの断片の分析と記述を通して、あなた知識が「ジャン」とともに用いられる発話が、しばしば、【非難】や「記憶想起の要求」であるという記述にとどまらない。

【矛盾の指摘】いう、矛盾関係が明らかになる環境が連鎖上前方に整った際に発話されることが分かった。

また、その【矛盾の指摘】は、我々がお互いにあなた知識を保有し、それを照らし合わせることで、あなたに行為の一貫性を要請している、という人々の指向をベースとしていることも明らかになった。

これまでの語用論的研究では、「用法」という記述の範囲が応答や前後の文脈に対し不十分であったのに対し、今回の研究の結果、参与者内部からの行為の記述を通して、「ジャン」という形式がどのような相互行為のリソースになっているかということ、そしてそれが、一貫性の要求という社会的指向をも記述できる可能性が明らかになった。

至らなかった点も多い。まず、「ジャン」という形式が、相互行為の資源として他にどんな行為を可能とするのかということ。また、データの特殊性から、多くのデータを収集することが極めて困難であった点である。今後の検討課題としたい。

## 引用文献

- Drew, Paul (1997) “‘Open’ class repair initiators in response to sequential sources of troubles in conversation”, *Journal of Pragmatics* 28, pp.69-101
- Sacks, Harvey (1992) *Lectures on Conversation*, vol.1, Blackwell
- Schegloff, Emanuel A. (2007) “*Sequence Organization in Interaction*”, Cambridge University Press
- MacWhinney, B. (2007). The TalkBank Project. In J. C. Beal, K. P. Corrigan & H. L. Moisl (eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*, Vol.1. Hounds-mills: Palgrave-Macmillan.
- Pomerantz, Anita (1980) Telling my side: “limited access” as a “fishing” device, *Sociological Inquiry* 50: 186-98.
- 井上史雄 (1994) 『方言学の新地平』, 明治書院
- 天田城介 (2001) 「構築主義の困難——自己と他者の〈語る〉場所」, 『現代社会理論研究』第 11 号, 現代社会理論研究会, pp. 1-15
- 片桐雅隆 (2003) 『過去と記憶の社会学—自己論からの展開』, 世界思想社
- (2006) 『認知社会学の構造 カテゴリー・自己・社会』, 世界思想社
- 松丸真大 (2001) 「東京方言のジャンについて」阪大社会言語学研究ノート 3, pp.33-48
- 嶺田明美 (2005) 「山梨県甲府市および中巨摩郡の若年層の用いる「ジャン」の実態報告」  
學苑 773, A53-A58, 昭和女子大学
- 好井裕明 (1999) 『批判的エスノメソドロジーの語り——差別の日常を読み解く』新曜社.
- 劉 雅静 (2008) 「「デハナイカ」の用法間の関連性について」, 言語学論叢 オンライン版創  
刊号 (通巻 27 号), 筑波大学 一般・応用言語学研究室
- 鷲田清一 (2013) 『<ひと>の現象学』, ちくま書房

---

## 注釈

i 「社会的行為」は、会話参与者が発話で達成している対人的なやりとりを指す。

ii Schegloff(2007)によれば、連鎖組織 (Sequence Organization) の研究とは、連続する発話が前の発話 (ターン) といかに筋の通ったものとして構成され、いかに合理的であるのかということを解明することである。

iii 「指向」は、他の参与者の受け取り方や発話・ジェスチャーから例証した参与者のありかたである。

iv 「選好応答」とは、ある先行する連鎖への好まれた応答である。例えば【誘い】の応答には【受諾】が選好応答である。そのため、非選好応答である【非受諾】の場合、沈黙や遅れ、応答が長くなるなどの特徴がでる。